

荒廃した館に現れる化物と百鬼夜行

——『今昔物語集』卷二十七第三十一話を起点に——

崔 鵬偉

一 はじめに

百鬼夜行というと、室町時代に世に現れて、江戸時代に数多く模写された百鬼夜行絵巻とその絵が想起されがちである。絵巻には、草履や盥など道具類が化した妖怪のみが描かれるものもあれば、同時に蛙や兎など動物が擬人化した姿で描かれるものもある。これらとは別に、鬼やそれに類する異形のものたちが夜中に集団で移動する記録、すなわち百鬼夜行譚は、平安時代院政期以降の説話集や物語などにしばしば確認できる。

小稿で取り扱う『今昔物語集』（以下『今昔』）卷二十七第三十一話「三善清行宰相、家渡語」は、百鬼夜行譚の一つとされている。そこには、以下の内容の伝承が収載される。

三善清行（八四七〜九一八）が、五条堀川にあった妖怪が出現するという荒廃した館を買い取り、単身その家に出向いて一夜を明かす。深夜に様々な怪異が現れるが清行は動じず、やがて登場した首領の翁の正体を、年老いた狐だと暴き、理をもって説得し、その一族を大学寮南門の東脇の空き地に移住させた。

先行研究のうち、伊藤昌広氏は、「百鬼夜行譚」において、本話を百鬼夜行譚の一つとして挙げる。⁽¹⁾ また田中貴子氏は、『百鬼夜行の見える都市』において、本話を化物屋敷型百鬼夜行とする。⁽²⁾ しかし、その根拠について、両氏は詳細に述べず、さらに検討する余地があると考えられる。はたして本話を百鬼夜行譚とみることはできるのだろうか。

一方、出典未詳の本話であるが、事物の起源を記した鎌倉中期の事典である『塵袋』や、それを増補した『塵添壺囊鈔』においては、鬼神などの住む悪所が実在する証として取り挙げられている。また、本話に基づいて描かれたとされる絵画作品は、別本『化物草子』(図1)や、元文五年(一七四〇)出版の画論書『画巧潜覧』(図2)などに確認できる。そのほかに、この話は広く流布した形跡がなく、『今昔』という作品とともに、江戸中期までほとんど世間に知られていなかったようである。⁽³⁾

従来、六朝志怪小説が『今昔』に影響を与えたとされている。本話のような屋敷に現れる怪異に動じず、冷静にそれを撃退する話は、『風俗通義』怪神篇や、『列異伝』『搜神記』『搜神後記』等、中国の志怪小説の類に数多く確認できる。本話の原型を、これらに求めることは可能であろうか。また、この話は絵の形で江戸時代に流布していた。その図像と同時代の百鬼夜行絵巻とを比較して、それは百鬼夜行の図とみなされていたかを考えてみたい。

小稿では、荒廃した館に化物が夜中に続々と現れるという話型に注目し、まず三善清行にまつわる諸伝承、また『風俗通義』『列異伝』等の中国の記録を手がかりに、この説話の成立背景を考察する。それによってこの説話が、『今昔』に収録された当時において、どのように捉えられていたのかを明らかにしたい。ついで、別本『化物草紙』の図像や詞書を検討しながら、『今昔』に由来するこの説話が絵画化に際して、どのような取捨選択を受けたのかを指摘し、その享受の様相から百鬼夜行譚と百鬼夜行絵巻との関連性を論じる。これにより、百鬼夜行のイメージの変遷、および百鬼夜行譚の成

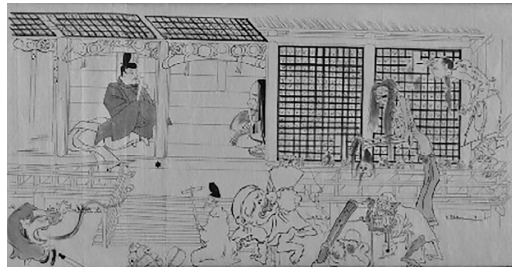


図1 『化物草紙』(早稲田大学図書館蔵)

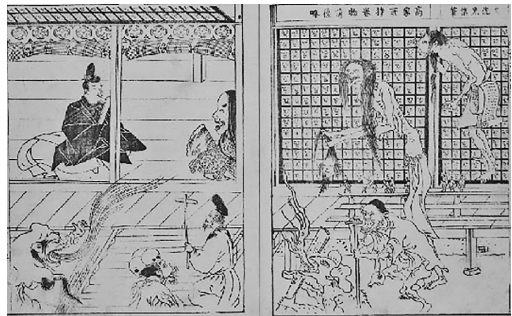


図2 『画巧潜覧』(大英博物館蔵)

立や享受の一端を浮かび上がらせることができるだろう。

二 『今昔』にみる怪異説話

まず、『今昔』巻二十七第三十一話「三善清行宰相、家渡語」の本文を掲げる（傍線などの記号はすべて私に付した。以下同じ）。

Ⅰ 今昔、宰相三善ノ清行ト云フ人有ケリ。世ニ善宰相ト云フ、此レ也。淨藏大徳ノ父也。万ノ事知テ、止事無カリケル人也、陰陽ノ方ヲサヘ極メタリケリ。

Ⅱ 而ル間、五条堀川ノ辺ニ、荒タル旧家有ケリ。a 悪キ家也トテ、人不住ズシテ久ク成ニケリ。善宰相、家無カリケレバ、此ノ家ヲ買取テ、b 吉キ日ヲ以テ渡ラムトシケルヲ、親キ族此ノ由ヲ聞テ、「強ニ悪キ家ニ渡ラムト為ル、極テ益無キ事也」トテ、制シケレドモ、善宰相不聞入ズシテ、c 十月ノ二十日ノ程ニ、吉キ日ヲ取テ渡ケルニ、例ノ家渡ノ様ニハ無クテ、酉ノ時許ニ、宰相車ニ乗テ、d 畳一枚許ヲ持セテ、其ノ家ニ行ニケリ。

行着テ見レバ、五間ノ寢殿有リ。屋ノ体、立ケム世ヲ不知ズ。庭ニ大キナル松・鶏冠木・桜・トキハ木ナド生タリ。木共皆久ク成テ、樹神モ住スベシ。紅葉スル絡石這懸レリ。庭ハ苔地ニテ、掃ケム世モ不知ズ。宰相、寢殿ニ上テ、中ノ橋隱ノ間ヲ上サセテ見レバ、障子破懸リテ皆損ジタリ。放出ノ方ノ板敷ヲ掛セテ、持セタリツル畳ヲ中ノ間ニ敷テ、火ヲ燃サセテ、其ノ畳ニ、宰相南向ニ居テ、車ハ車宿ニ引入サセテ、雑色・牛飼ナドヲバ、「明旦參レ」ト云テ返シ遣リツ。

Ⅲ 宰相、只一人南向ニ眠リ居タルニ、夜半ニハ成ヌラムト思フ程ニ、①天井ノ組入ノ上ニ、物ノコソメクヲ見上タレバ、組入ノ子毎ニ顔有リ。其ノ顔毎ニ替レリ。宰相、其レヲ見レドモ、不騒ズシテ居タレバ、其ノ顔皆失ヌ。亦、暫許有テ見レバ、②南ノ庇ノ板敷ヨリ、長一尺許ナル者共、馬ニ乗次キテ、西ヨリ東様ニ四五十人許ニ渡ル。宰相、其レヲ見レドモ不騒ズシテ居タリ。

亦、暫許有テ見レバ、③塗籠ノ戸ヲ三尺許引開テ、女居ザリ出ヅ。居長三尺許ノ女ノ、檜皮色ノ衣ヲ着タリ。髪ノ肩ニ懸リタル程、極ク気高ク清氣也。匂タル香、艶ズ腹バシ。麝香ノ香ニ染返タリ。赤色ノ扇ヲ指隠タル上ヨリ出タル額ツキ、白ク清氣也。額ノ捻タル程、眼尻長ヤカニ打引タルニ、尻目ニ見遣セタル、煩ハシク気高シ。鼻・口ナド何ニ微妙カラムト思ユ。宰相、白地目モセズ守レバ、暫許居テ居ザリ返ルトテ、扇ヲ去タルニ、見レバ、鼻鮮ニテ匂ヒ赤シ。口脇ニ四五寸許銀デ作タル牙昨違タリ。奇異キ者カナト見ル程ニ、塗籠ニ入テ戸ヲ閉ツ。

宰相、其レニモ不騒ズシテ居タルニ、有明ノ月ノ極テ明キニ、木暗キ庭ヨリ、④浅黄上下着タル翁ノ、平ニ□□搔タル文挾ニ文ヲ指テ、目ノ上ニ捧テ、平ミテ橋ノ許ニ寄來テ、跪テ居タリ。其ノ時ニ、宰相音ヲ挙テ、「何事申ス翁ゾ」ト問ヘバ、翁、□キ皺枯レ小キ音ヲ以テ申サク、「年来住候ツル所ヲ、此ク令居給ヘバ、大キナル歎キト思給テ、愁ヘ申サムガ為ニ參テ候フ也」ト。

Ⅳ 其ノ時ニ、宰相仰セテ云ク、「汝ガ愁ヘ頗ル不当ズ。其ノ故ハ、人ノ、家ヲ領ズル事ハ次第二伝ヘテ得ル事也。而ルヲ、汝ヅ、e人ノ伝ヘテ可居キ所ヲ、人ヲ愕ヤカシテ不令住ズシテ、押居テ領スル、極テ非道也。実ノ鬼神ト云フ者ハ、道理ヲ知テ不曲ネバコソ怖シケレ。汝ハ、必ズ天ノ責蒙ナムトス。f此レハ他ニ非ズ、老狐ノ居テ人ヲ愕ヤカス也。鷹犬一ツタニ有ラバ、皆昨殺サセテム物ヲ。其ノ理、慥ニ申セ」ト。

其ノ時ニ、翁申サク、「仰セ給フ事、尤モ可遁キ所無シ。只、昔ヨリ住付テ候フ所ナレバ、其ノ由ヲ申ス也。人ヲ愕ヤカシ候フ事ハ、翁ガ所為ニ非ズ。一両候フ小童部ノ、制シ宣ベ候ヘドモ、制止ニモ不憚ズシテ、自然ラ仕ル事ニヤ候フラム。今ハ、此テ御マサバ何カ可仕キ。世間ハ隙無ク候ヘバ、可罷キ所不候ズ。g只、太学ノ南ノ門ノ東ノ脇ナム、徒ナル地候フ。許サレヲ蒙テ、其ノ所ヘ罷リ渡ラムハ何カバ」ト。宰相仰セテ云ク、「此レ、極テ賢キ事也。速ニ一孫引キ烈レテ、其ノ所ヘ可渡シ」ト。其ノ時ニ、翁音ヲ高クシテ答ヘヲ為ルニ付テ、四五十人許ノ音ナム散ト答ヘケル。

Ⅴ 夜嗟ヌレバ、宰相ノ家ノ者共迎ヘニ來ヌレバ、宰相家ニ返テ、其ノ後ヨリゾ此ノ家ヲ造ラセテ、例ノ様ニシテハ渡ケル。然テ住ケル間、聊ニ怖シキ事無クテ止ニケリ。

Ⅴ 然レバ、心賢ク智有ル人ノ為ニハ、鬼ナレドモ惡事モ否不発ヌ事也ケリ。思量無ク愚ナル人ノ、鬼ノ為ニモ被ル也トナム語リ伝ヘタルトヤ。

内容から、Ⅰ三善清行の人物紹介、Ⅱ引越しの経緯、Ⅲ引越し先に現れた様々な怪異および三善清行の反応、Ⅳ三善清行が怪異を説得し移住させる、Ⅴ後日譚、Ⅵ話末評と分けることができる。

以下、主に傍線部 a ~ f に注目しつつ、この説話の成立背景を考察する。なお、Ⅲの① ~ ④は、第三節において『化物草紙』の図像と対照するのに用いる。

2-1 三善清行と陰陽道

Ⅰによると、三善清行は、博識で陰陽道をも極めた者であるという。清行が諸々の怪異説について広く知っていることは、彼が記した『善家秘記』の逸文からうかがえる。例えば、『政事要略』卷七十・糾彈雜事十・蠱毒厭魅及巫覡才事・巫覡見鬼有徵驗事には、次のように述べられている。

此事雖迂誕、自所視、聊以記之。恐後代以余為鬼之董狐焉。

ここには、清行が正しく事実を書き記して後世に伝えようとする姿勢がうかがえる。傍線部にあるように、清行が自分自身を「鬼之董狐」になぞらえていることが記されている。つまり、清行が自らを『搜神記』の撰者である干宝に擬しているのである。

『善家秘記』の逸文は『今昔』にも書承される。例えば、『今昔』卷十六第十七話「備中国賀陽良藤、為狐夫得觀音助語」には、本話と同じく狐の怪異が記されている。このように、清行が引越し先に現れた怪異の正体をずばりと見破ることができたのは、やはりその博識が背景にあったからだろう。

また、清行が陰陽道に精通していた記録としては、清行自身が昌泰三年（九〇〇）十月十一日、菅原道真に奉った書「奉菅右相府書」、『本朝文粹』卷七「一八七」が確認できる。

某、昔者遊学之次、偷習術数。天道革命之運、君臣剋賊之期、緯候之家、創論於前、開元之經、詳説於下。

推^二其年紀^一、猶如^レ指^レ掌。

清行は自ら術数、すなわち讖緯・天文・暦法などに精通していることを述べている。⁽⁹⁾これを踏まえると、**I**でいう陰陽道は、天文・暦法・卜占のことを指していることが分かる。このことは、傍線部 **b**・**c** にみられる、吉日を卜して引越するという描写からも裏付けることができる。

つまり、清行は伝説上の安倍晴明のように不思議な呪術を身につけていたわけではない。清行が呪術によって怪異の正体を見破り、それを退治したという説は成立しない。清行は文書博士兼大学頭に任ぜられ、『革命勘文』『意見十二箇条』などを執筆した、延喜時代を代表する正統的な儒者であった。⁽¹⁰⁾ 本話の本質は、清行が儒者として正しく怪異を見抜いた話と考えられる。⁽¹¹⁾

2-2 悪しき家について

Ⅱ怪異が繰り広げられる場所を、傍線部 **a** では「悪き家」と称するのに対して、後述するように、『化物草紙』では「おに」の住む家とする。『今昔^Ⅳ』においては怪異の正体を老狐の変化とする一方、話末評^Ⅵにおいては鬼としており、『化物草紙』の記述は話末評に依拠している可能性がある。また、『塵袋』巻二ノ二「凶宅」⁽¹²⁾によるものとも考えられる。

居所^ニ悪所^ト云^フ事アルハ実証ナキニアラズ。サルコトナシト云^フ説如何。

悪所^トナツクルニ^二別アリ。一^{ニハ}、鬼神等ソノ家^ニ住^{シテ}人ヲ損^{セシ}種々ノ形ヲ現^{スル}ニヨテ、是^ヲスツ。善相公ノ鬼殿^ニユキテ異形ノモノトモ^ヲミケルカ如^シ。コレハ実証目^ニアラハル、上^ニ勿論ナリ。二^{ニハ}、サル事ハナクシテ、住^{スル}人モノアシク、オトロヘヤミナトスルコト、ウチツ、キスレハ、コレヲ家ノタ、リト思テ、悪所^トナツケテ人ヲ害ズ。コレニ不実^ノウタカヒ有ヘキナリ。楽天ノ詩^ニツクリテ、ヲロカナルコトニノ給ヘル。コノ篇^ニツキテ、ヒガ心エノ有故ナリ。キル主ノ打ツ、キ其ノ身^ニ災アリ、モノアシカルヘキ運^ヲアラムハ、マタク家ノシワサ、所ノワサハイニハアラヌヲシツケテ、推^{シテ}思ナシニ、コレヲ居所^トカトイヒナシテ、人ノ運^ヲヲトロヘ物ノアシカルヘキユヘノ自然^ニ相続^{スル}ヲ、下郎道理ナキヲハ、思モイレヌコトヲ、ロカナリトハ云ナリ。カノ凶宅ノ詩^{ニハ}、人疑不^ニ敢買^一、日毀^ニ土木功^一。嗟々俗

人心、甚矣其愚蒙。但懼^レ災將^レ至、不^レ思^レ過所^レ從。我今題^二此詩^一、欲^レ寤^二迷者胸^一ト云ヘリ。ヲハリノ詞^二、寄^レ言家与^レ國、人凶非^二宅凶^一ト仰^セラレタリ。江相公對策^二、宅無^二吉凶^一トコソカキタレ。同^二ジニヤ^一。

ここでは、二種類の「惡所（よくない居所）」について説明する。清行の場合はその一つ目である。すなわち、鬼神などが家に棲みつき、人々を損ない、様々な形相を現することによって家を捨てさせる（傍線部）。二つ目は、鬼神などのしわざではなく、住人の不運を居所のせいに押し付けて惡所と名づける場合である。白居易「凶宅詩」（『白氏文集』卷一「〇〇〇四」）、および大江朝綱の對策文（『論運命』、『本朝文粹』卷三「七八」）が引かれる。

白居易「凶宅詩」にある、「梟鳴松桂樹、狐藏蘭菊叢（廢れた家には梟や狐が棲みつく）」という句は、『源氏物語』「夕顔」「蓬生」、「徒然草」第二百三十五段、『曾我物語』卷五「呉越戰の事」、謡曲「錦木」「殺生石」「忠度」「月見」、『太平記』卷四「備後三郎高德の事附呉越軍の事」などにおける受容が指摘されている。⁽¹³⁾さらに、『十訓抄』第二「可離驕慢事」や『古今著聞集』卷十七第五百七十九話において、「凶宅詩」に言及されている。また、大江朝綱對「論運命」にみる「宅無^二吉凶^一」というのは、『宋書』卷七十一・王僧綽⁽¹⁴⁾伝にみられる王僧綽の故事を踏まえている。

このように、『宋書』王僧綽伝や白居易「凶宅詩」における凶宅のイメージは、日本の文芸作品に強い影響を与えたい。しかし、鬼神が棲みついていのかどうかにおいては、それは『今昔』でいう「惡キ家」とはやや異質なものである。『今昔』当該話と近いイメージを持つものは、『風俗通義』怪神篇や志怪小説などにみられ、いわゆる凶宅譚の類である。たとえば、『風俗通義』怪神篇には次のような話がみられる。⁽¹⁵⁾

北部督郵西平到伯夷年三十所、大有^二才決^一、長沙太守到若章孫也。日晡時到^レ亭、勅^二前導人^一。録事掾白、今尚早、可^レ至^二前亭^一。曰、欲^レ作^二文書^一、便留。吏卒惶怖、言^二當^二解去^一。伝云、督郵欲^レ於^二樓上^一觀望^上、亟掃除。須臾便上。未^レ冥、樓鐙、階下復有^レ火。勅、我思^レ道、不^レ可^レ見^レ火、滅去。吏知^二必有^レ變、當^二用^二赴照^一、但藏置^二壺中^一耳。既冥、整^レ服坐誦^二六甲・孝經・易本^一訖、臥。有頃、更^レ轉^二東首^一、以^二巾^一結^二兩足^一幘冠^レ之、密拔^レ劍解^レ帶。夜時、有^二正黑者^一四五尺、稍高、走至^二柱屋^一、因覆^二伯夷^一。持^レ被掩^レ足、跣脫幾失、再三、徐以^二劍帶^一擊^二魅脚^一、呼^二下火^一上照視、老狸正赤、略無^二衣毛^一。持下燒殺。明旦發^二樓屋^一、得^二所^一髡人結百餘。因從^レ此絕。伯夷拳^二孝

廉^一、益陽長。

到伯夷^{とうはくい}という者が夕方に亭（宿駅）に到着し、一泊する。夜中に魅が現れ襲ってくるが、これを制圧する。魅の正体は老いた狸だった。これを焼き殺し、翌朝に建物を調べると、そられた髻が百ほど発見された。以降、怪異は起こらなくなつたという話である。同話は『列異伝』、二十卷本『搜神記』卷十八、『抱朴子』内篇・登涉、『搜神後記』卷九などに確認できる。これらの話において、主人公の名前の表記はまちまちであるが、野伯夷とするのが正しい。なぜならば、『後漢書』卷二十九にその祖父である野憚^{しゅうん}の伝がみられるからである。また、怪異の正体は狸・狐・犬と一致しないが、人々に害をなすところや、それを「魅」（抱朴子）では「鬼」と称する点においては、『今昔』や『化物草紙』と通じている。しかし、傍線部dのような、畳一枚だけをもって凶宅に向くという描写は、六朝時代の志怪小説にはなく、唐代になつてからみられるようになる。たとえば、『博異志』には、次のような話が収録されている。⁽¹⁶⁾

天宝中、長安永樂里有^二凶宅^一、居者皆破、後無^二復人住^一。暫至、亦不^レ過^レ宿而卒、遂至^二糜破^一。其舍宇唯堂序存、因生^二草樹^一甚多。有^二扶風蘇遏^一、恠恠遽苦貧窮、知^レ之、乃以^二賤価^一、於^二本主^一質^レ之。纔立^二契書^一、未^下有^二錢^一歸^上主。至^レ夕、乃自携^二一榻^一、当^レ堂鋪設而寢。一更已後。未^レ寢、出^二於堂^一。徬徨而行。忽見^二東牆下有^二赤物^一、如^二三人形^一、無^二手足^一、表裏通徹光明。而叫曰、咄。遏視^レ之不^レ動。良久、又按^レ声呼曰、爛木、咄。西牆下有^レ物応曰、諾。問曰、甚没人。曰、不^レ知。又曰、大硬鏹。爛木対曰、可^レ畏。良久、乃失^二赤物所^一在。遏下^レ階、中庭呼^二爛木^一曰、金精合^レ属^レ我、縁^レ没敢叫喚。対曰、不^レ知。遏又問、承前殺^二害人^一者在^二何処^一。爛木曰、更無^二別物^一、只是金精。人福自薄、不^レ合^レ居^レ之、遂喪^二逝^一。亦不^二曾殺傷^一耳。至^レ明、更無^二事^一。遏乃自假^二鍬鍤之具^一、先於^二西牆下^一掘。入^レ地三尺、見^二朽柱^一、当心木如^二血色^一、其堅如^レ石。後又於^二東牆下^一掘兩日、近^二一丈一、方見^二一方石^一、闊一丈四寸、長一丈八寸。上以^二篆書^一曰、夏天子紫金三十斤、賜^二有^レ德者^一。遏乃自思、我何以為^レ德。又自為^レ計曰、我得^二此宝^一、然修^レ德亦可^レ禳^レ之。沈吟未^レ決。至^レ夜、又歎息不^レ定。其爛木忽語曰、何不^レ改^レ名為^二有德^一、即可^レ矣。遏曰善、遂称^二有德^一。爛木曰、君子儻能送^二某於昆明池中^一、自^レ是不^二復撓^一吾人^一矣。有德許^レ之。明辰更掘丈餘、得^二一鉄甕^一、開^レ之、得^二紫金三十斤^一。有德乃還^二宅価^一修葺、送^二爛木於昆明池^一。遂閉^レ戸読書、三

荒廢した館に現れる化物と百鬼夜行

年、為^二范陽^一請入^レ幕、七年内、獲^二冀州刺史^一。其宅更無^レ事。

唐の天宝年間、長安の永樂里に一つの凶宅があり、宿る者はみな死んだという。蘇遏という人が安い値段でそれを入手し、榻（臥具）ひとつを携えてそこで夜を過^二す。初夜の頃、金の精が現れて、捕まえようとしたが、爛木（朽ちた柱の精）のせいでその姿を見失った。翌日、西の壁の下の地面を掘ると朽ちた柱を見つけた。また東の壁の下の地面を掘ると、二日後、篆書の刻まれた石を見つけた。その夜、爛木から助言があり、それに従ったところ、紫金三十斤を得て、最後は冀州刺史まで登った。その宅には何事も起こらなかったという。

このように、六朝・唐代の凶宅譚は、「ある人が新しい任地に赴任すると、官舎に住んだものは必ず異常なことが起こるため、放置され荒れ放題となっている。その人が恐れずに、官舎に住むと鬼神や妖怪、狐などの動物が正体であったことが判明し、問題を解決し、官舎に住むことができる」という共通の展開を持つ。⁽¹⁷⁾ 凶宅譚という話型からみると、『今昔』卷二十七第三十一話「三善清行宰相、家渡語」は六朝志怪以来の構成を変えることはなかった。細部の描写においては、唐代の志怪風小説にはじめてみられる設定が確認できる。総じていえば本話は、右に列挙したような六朝・唐代の小説に触発されて、日本で創作された怪異説話とみることができよう。

2-1-3 吉日の引越し

傍線部 b・c にあるように、平安貴族たちは、引越しなどにあたって、日にちの吉凶を重視している。要するに、暦に記された禁忌を重要視している。

「はじめに」で言及したように、先行研究で本話は百鬼夜行譚の一つとされている。しかし「百鬼夜行」は、陰陽道でいう凶日の一種とされ、それに当たる月々の日取りは暦に記載されている。例えば、源為憲（? - 1011）が著した幼学書『口遊』陰陽門十七には、「子子。午午。巳。戌。未。辰。」と、「謂^二之百鬼夜行^一」と、百鬼夜行が出現するときの日取りが記されている。その日取りに注意を払いさえすれば、百鬼夜行との遭遇を回避することができるはずである。⁽¹⁸⁾

清行の生存時代の暦に、百鬼夜行の注記がすでにみられたかどうか定かではない。ただ、暦法に詳しく吉日に引越した

清行は、不吉な百鬼夜行に遭遇することはなからう。となると、説話の中で清行が引越し先で目撃した怪異は百鬼夜行とは別物である。つまり、この話は『今昔』に収録された時点では、百鬼夜行譚として捉えられていなかったのである。

それでは、なぜ今日の研究者はそれを百鬼夜行譚として扱うのであろうか。その理由は、第三節において、『今昔』Ⅲと『化物草紙』との分析によって明らかにしたい。

2-4 怪異の正体と実の鬼神

『今昔』Ⅳにおいて、傍線部 f のように、清行が怪異の正体を見抜いたのは、なぜであらうか。直前の傍線部 e では、人が受け伝えて住むべきところを、怪異たちが住人を脅かして住まわせず、強引に居すわるといふ行為は道理にかなわいとし、さらにまことの鬼神がすべきことではなく、必ず天罰を受けるに違いないとする⁽¹⁹⁾。

それでは、ここであるまことの鬼神とは何であらうか。邸宅の所有権争いにおいて、先住者に対して道理をもつて説得し、所有の正当性を主張する話は、『今昔』卷二十七第二話「川原院融左大臣霊、宇陀院見給語」にみられる。

今昔、川原ノ院ハ融ノ左大臣ノ造テ住給ケル家ナリ。陸奥ノ国ノ塩竈ノ形ヲ造テ、潮ノ水ヲ汲入テ、池ニ湛ヘタリケリ。様ニ微妙ク可咲キ事ノ限ヲ造テ住給ケルヲ、其ノ大臣失テ後ハ、其ノ子孫ニテ有ケル人ノ、宇陀ノ院ニ奉タリケル也。然レバ、宇陀ノ院、其ノ川原ノ院ニ住セ給ケル時ニ、醍醐ノ天皇ハ御子ニ御セバ、度ニ行幸有テ微妙カリケリ。

然テ、院ノ住セ給ケル時ニ、夜半許ニ、西ノ台ノ塗籠ヲ開テ、人ノソヨメキテ参ル気色ノ有ケレバ、院見遣セ給ケルニ、日ノ装束直シクシタル人ノ、大刀帶テ笏取畏リテ、二間許去キテ居タリケルヲ、院、「彼ハ何二人ゾ」ト問セ給ケレバ、「此ノ家ノ主ニ候フ翁也」ト申ケレバ、院、「融ノ大臣カ」ト問セ給ケレバ、「然ニ候フ」ト申スニ、院、「其レハ何ゾ」ト問ハセ給マヘバ、「家ニ候ヘバ住候フニ、此ク御マセバ忝ク所セク思給フル也。何ガ可仕キ」ト申セバ、院、「其レハ糸異様ノ事也。我レハ人ノ家ヲヤハ押取テ居タル。大臣ノ子孫ノ得セタレバコソ住メ、者ノ霊也ト云ヘドモ、事ノ理ヲモ不知ズ、何デ此ハ云ゾ」ト高ヤカニ仰セ給ケレバ、霊搔消ッ様ニ失ニケリ。其ノ後、亦現ル、

事無カリケリ。

其ノ時ノ人此ノ事ヲ聞テ、院ヲゾ忝ク申ケル、「猶只人ニハ似サセ不給ザリケリ。此ノ大臣ノ靈ニ合テ、此様ニ瘞^{すく}ヤカニ異人ハ否不答ジカシ」トゾ云ケルトナム語リ伝ヘタルトヤ。

河原院は源融（八二二〜八九五）の邸宅であつたが、融の死後、子孫によつて宇多院（八六七〜九三一）に献上された。とある日の夜中、融の霊が宇多院の御前に現れて、河原院の所有權を主張する。一方宇多院は、融の子孫から献上されたから住んでいるので、たとえ、ものの霊であつても道理を弁えるべきだと反論した。すると霊は姿を消し、以降現れなかつたという。傍線部の「者ノ靈」は、『今昔』卷二十七第三十一話でいう「実の鬼神」と対応しているであろう。

また、『北野天神縁起』には、清行の逸話が記されている。

その日の午時ばかりに、善相公のとぶらひに參給侍ければ、おとゝの左右の耳より青龍の頭をさしいで、善宰相につげ示しける様、「われ申文を作りて、梵天・帝釈に訴申により、はやくことはりを蒙りて、怨敵を報ぜんとするほどに、尊閣の男淨藏たちまちに降伏せんとす。制せられよ」と、しめし給ければ、相公、撰公が真竜にあへりけんたらしいかくやと覺て、この由をしるしてつかはしき。淨藏これを見て、ゆふかげになりければ、漸しりぞき出にけり。そのとき本院大臣はやがて薨じ給ぬ。御年卅九とぞうけ給侍。

延喜九年（九〇九）三月以来、藤原時平が菅原道真のたたりで病に伏していた。その病氣平癒祈禱に、清行の息子の淨藏（八九一〜九一四）を屈請することになった。すると、同じ日の午の時、清行とともに見舞いに参つたところ、道真の霊が青龍の姿で時平の耳から現れ、自らの復讐の正当性を主張し、淨藏の祈禱を止めるようにと要請した。それに応じて、清行は淨藏に祈禱を止めさせた。結果、時平が薨じたという。梵天・帝釈に訴状を奉つて復讐する道真の霊の要請を聞き入れた清行のイメージは、本話で合理性を重視する清行像と通ずる。

右に挙げた、源融や菅原道真の霊のように、道理を弁える鬼神のイメージのもと、『今昔』において清行は、屋敷に居座ろうとする怪異たちが鬼神ではないと判断したのだろう。その正体を狐だと推測しえたのは、やはり211で述べたように清行が怪異説に詳しいという事情が考慮されたからではないだろうか。

以上、本話でみられる清行の人物像は、前掲したいくつかの伝承記録からも裏付けることが可能である。注意すべきは、本話を根拠に、清行が怪異を退治できる不思議な陰陽術を習得している人物とすることはできないことである。

本話は、話型や細部の描写において、六朝・唐代の小説と類似することから、それらの小説に触発されて創作された怪異説話とみることができる。また、2・3で取り挙げた『口遊』が示すような、院政期における百鬼夜行に対する認識からすると、本話は百鬼夜行譚として『今昔』に採録されたものではないと考えられる。さらに、二話一類の様式を踏まえてみると、本話は、前話と怪異の様子（馬に乗る小人たち）が類似しており、狐の怪異を語る点において後話と通ずる。⁽²⁰⁾要するに、撰者が本話を『今昔』に編入した際には、単なる狐の怪異説話として捉えていたのではないだろうか。しかし先行研究では、この怪異説話は百鬼夜行の話と認識されている。それはなぜなのだろうか。そこで次節では、この話が絵巻に描かれたことで、どのように変化したのかを確認したい。

三 『化物草紙』の画像と享受

早稲田大学図書館蔵『化物草紙』第二話の詞書を示すと、以下の通りである。

① むかし、たひらの京、五条ほりかはのわたりに、よきいゑの、あれたるあり。おにすむよしを、いひつたへて、ひともゐすして、ひさしくなりたり。善宰相といふひと、いゑなきによりて、このいゑをつたへとりて、わたりゐんとす。いみしく、ひとせいし、おそれけれども、あはてかかはらず、わたりてみるに、庭のき・えた、しけくして、ひのかけもみえず。みきりのくさふかくおひて、人のあとなし。寝殿のかうしをあけて、のほりぬ。よにいりぬれば、うし・くるま・ともの人、かへしやりて、ひとりゐたり。

② かくて、よなかになるほとに、さま／＼、ひとににぬ、すかたあるものとも、まへに現すれとも、宰相、めもみかけす、ものもいはねは、あさきかみしもきたるおきな、申ふみもちて、みきりにのぞみて、としころ、おきなかすみわたりさふらふ、いゑをこしめさるゝことを、うれへまうすよしをいふ。

① 宰相、こたへて、われは相伝ありて、わたりゐる。なんちはなにのゆへに、すみわたりしそ。すみやかにさりて、のきねといはれて、おきなもろともに、百人はかり、こゑありて、なきなきて、さるへきよし、いらへけり。

総じて言えば、①は『今昔』のⅡ、②はⅢ、③はⅣとそれぞれ対応している。Ⅰ・Ⅴ・Ⅵにあたる記述がないのは、人物紹介や後日譚および話末評を絵で表現するのは難しいからであろうか。

清行の前に現れた怪異の様子について、『今昔』Ⅲでは詳細に述べているのに対して、『化物草紙』④には、「さまく、ひとににぬ、すかたあるものとも」としかない。その上、①には怪異の正体が狐だとする記述や、怪異たちの移住先（傍線部g）に関する記述がない。

一方、図1に示した場面と対照すると、『今昔』Ⅲに述べられる怪異①～④は、すべて巧みに反映されていることがわかる（その対応関係を改めて図3に示す）。もし『化物草紙』が『今昔』に倣って狐の怪異の図を画こうとしているならば、『化物草紙』にあつて『今昔』には登場しない図柄、とりわけ図4・5・8・9が、狐の怪異として解釈できるかどうかを検討することで明らかにできるはずである。

3-1 髑髏を戴く狐

まず、狐と髑髏との関連について、『西陽雜俎』前編・卷十五には、旧説、野狐名「紫狐」。夜撃_レ尾火出。将_レ為_レ怪、必戴_二髑髏_一。拜_二北斗_一、髑髏不_レ墜、則化_レ為人矣。



図4 髑髏を戴く化物
（『化物草紙』）



図5 髑髏を戴く化物
（『画巧潜覧』）

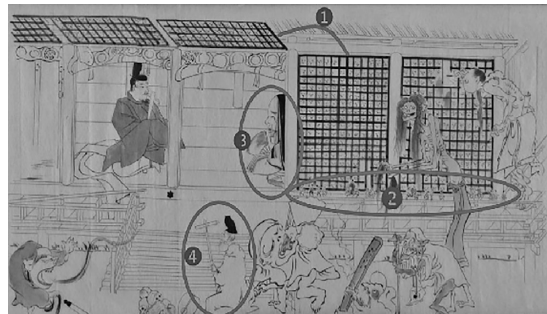


図3 『今昔』と『化物草紙』（早稲田大学図書館蔵）
との対比図

とある。^②野狐が夜に尻尾を撃つことによって火を出す。また人間に化ける際は、必ず髑髏を戴いて北斗星を拜むという。

また、『宋高僧伝』巻二十四「唐沙門志玄伝」(大正五〇一八六四上)には、

其夜月色如_レ昼。見一狐從_二林下_一將_二髑髏_一置_二之於首_一、揺_レ之落者不_レ顧、不_レ落者戴_レ之。更取_二芥草・墜葉_一遮_二蔽其身_一、逡巡成_二一嬌嬈女子_一。

とあり、狐が女子に化ける前の準備段階では、髑髏を戴く描写が確認できる。

これらの記述から分かるように、狐が人間に化ける際に髑髏を戴く記録は、唐代以降の書物に確認できる。このことは、日本においても受容されていた。図6・7はそれをうかがわせる好例である。^③よって、図4・5を狐が変化した姿と考えることができる。

3-2 吐く息が火となる狐

つぎに、火を吹き出す化物(図8・9)について考察する。

前掲『西陽雜俎』にあるように、狐は尻尾をふって火を出すとされる。図10・11はそれを反映する日本中世以降の絵画資料である。一方、狐が



図8 口から火を吐く化物(『化物草紙』)



図9 口から火を吐く化物(『画巧潜覧』)

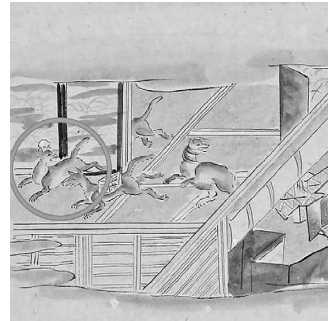


図6 髑髏を戴く狐(早稲田大学図書館蔵『狐草紙』)



図7 髑髏を戴く狐(早稲田大学図書館蔵『文観阿舍利絵巻』)

口から火を吹き出す作例は江戸後期にしか確認できない(図12・13)。それらの作例は、時代的に『化物草紙』『画巧潜覧』よりやや遅れるものであるため時間的には前後するが、口から火を吐く『化物草紙』『画巧潜覧』の図8・9の化物が狐から変化した姿であると捉えられないことはない。

図4・5・8・9以外の図柄については、その正体を突き止める手がかりが欠けているため、それを狐の怪異と解釈することは、慎重に行う必要がある。

無論、以上の考察は『化物草紙』が、『今昔』に忠実に依拠し、狐の怪異の図を画いていることが前提である。それでは、この前提条件を一旦外して、『化物草紙』をみると、どのように捉えることができるだろうか。

3-3 化物絵の絵手本

『化物草紙』の模写本は、大阪市立美術館所蔵本と早稲田大学図書館所蔵本の二本のみが確認されている。図1の場面



図10 尻尾から火を出す狐
(国際日本文化研究センター蔵『付喪神絵詞』)

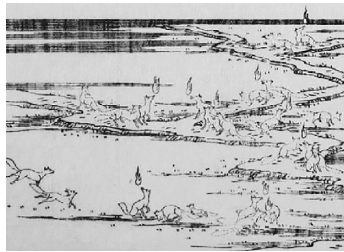


図12 口から火を吹き出す狐(早稲田大学図書館蔵『江戸名所図会』「王子稲荷」)



図13 口から火を吹き出す狐(国文学研究資料館 三井文庫旧蔵資料『一宵話』巻之二「稲荷の狐」)



図11 尻尾から火を出す狐
(国際日本文化研究センター蔵『怪物画本』)

は、これ以降の絵巻に同様な図がみられず、殆ど受容されなかったようである。一方、『画巧潜覧』に収められた図2は、絵師の間である程度享受されていたらしい。

図14は、文化三年（一八〇六）に出版された、山東京伝の黄表紙作品『善知安方忠義伝』前篇卷五「霞の谷」に付された、歌川豊国（二七六九〜一八二五）の挿絵である。その出処が『画巧潜覧』図2となることは、京伝の自注から明らかである。図柄の配置は異なるが、図2に由来すること大方見てわかる。

かくて光国又書院とおぼしき所にゆきて見れば、金地の絵障子朱欄干、結構美麗を尽すといへども、いづれも破損、草生苔蒸て、雨露にしめりがちなる体なりしが、忽一陣の冷風颯と吹来り、やぶれたる翠簾を吹あぐる。そのうちを見るに、こ、にも異類異形の変化集居たり。或は櫛形の穴より、大なる斬禿の顔さし出して打笑、妻戸のかげより、一寸ばかりの人、馬に乘行列を正して出来ぬ。或は隻眼一足

三面六臂、手長足長のごときも交居て、荒海の障子の絵の、抜出たるかとうたがふばかりなり。

大宅太郎光国が、下総国にある相馬内裏に妖怪が出没すると聞き、その実否を確かめようと、荒廃した内裏の跡地に向いた。日が沈んだ後に到着した光国は、古畳を宮殿の中央に敷き、その上に座りながら妖怪が現れるのを待った。すると、数百の骸骨が飛び出して戦ったり、老若男女の幽霊が念仏を唱えたり、手足を生やした角盥（図15）やおはぐろの女房（図16）などの化物が続々と出現した。ついに、櫛ごとに目・口が笑う格子や一寸ばかりの馬に乗る小人など図1・2にみられる化物が登場したという。

また、同じく『善知安方忠義伝』の絵手本となったものに、鈴木隣松筆絵本『狂画苑』所収の「百鬼夜行図」がある。

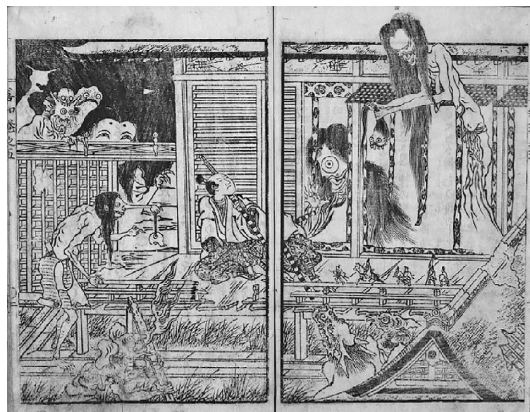


図14 『善知安方忠義伝』挿絵その六
（早稲田大学図書館蔵）

この「百鬼夜行図」に依拠した図16の続きに、図14が配置されているわけである。このように、百鬼夜行絵巻の図柄と『化物草紙』のそれは、荒廃した屋敷に出現する化物という一つの文脈において、受容されていた。これは、『化物草紙』図1の場面が、『画巧潜覧』に収録されることによって、のちに百鬼夜行絵巻と同様に、化物絵の絵手本として流布享受されていた証拠であろう。

『化物草紙』の絵師は、『今昔』によりつつ、新しい図柄を付け加えている。し

かし、それらをすべて狐の怪異と解釈することはできない。つまり、『今昔』のこの話は、絵画化された時点で、すでに単純な狐の怪異説話ではなく、様々な化物の話として捉えなおされていた。さらに、その絵は、百鬼夜行絵巻と同時に絵手本として、江戸時代の絵師たちによって享受された。時には、その図柄は百鬼夜行絵巻に混入されることもあった。例えば、図17にみられる小人の図柄は、他の百鬼夜行絵巻に確認できない。このような化物が百鬼夜行絵巻に描かれるようになったのは、前述の事情が理由として考えられよう。

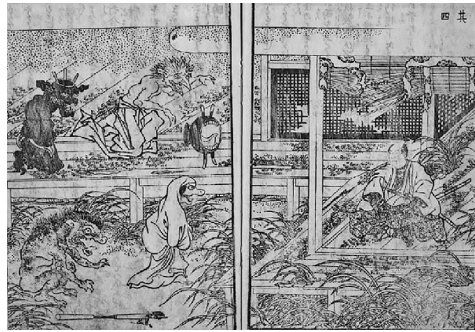


図15 『善知安方忠義伝』挿絵その四
(早稲田大学図書館蔵)

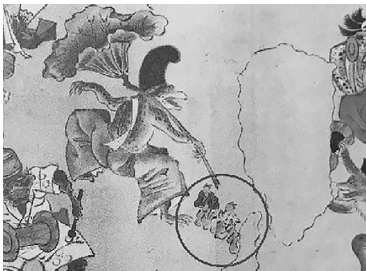


図17 一寸ばかりの小人(京都市立芸術大学芸術資料館蔵『百鬼夜行絵巻』)

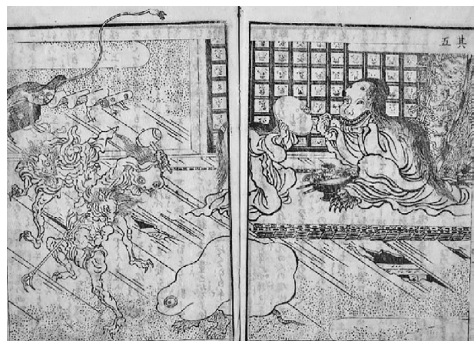


図16 『善知安方忠義伝』挿絵その五
(早稲田大学図書館蔵)

四 おわりに

小稿では、三善清行にまつわる諸伝承と『今昔』巻二十七第三十一話を比較し、また『風俗通義』『列異伝』等の中国の諸書を手がかりに、この説話の成立背景を検討した。

荒廃した屋敷に化け物が夜中に続々と現れるという話型は、後漢末の記録や六朝志怪には既に確認できる。しかし、細部の描写においては、唐代の小説にしか見えない部分が存在する。それらに触発されて日本で創作された怪異説話の一つとして、『今昔』に採録された本話は、はじめは百鬼夜行譚ではなく、単なる狐の怪異説話として捉えられていた。

ところが、この話の享受史に注目すると、それが『化物草紙』において絵画化される際には、新しい図柄が付加され、様々な化物の話として捉えなおされたことがわかる。さらに、その絵は、『画巧潜覧』という画論書を通じて、江戸時代の絵師たちによって享受され、百鬼夜行絵巻と同様に化物絵の絵手本とされていた。結果、その図柄が百鬼夜行絵巻にも確認できるようになったと考えられる。このような享受過程を経て、本話が百鬼夜行譚とみなされるようになったのではないだろうか。以上の検討によって、『今昔』が近世においてどのように享受され、再解釈されたのか、その流布の一端を提示することができた。

従来、百鬼夜行絵巻は百鬼夜行譚のパロディーにすぎないとされてきた。しかし、小稿で示したように、元々百鬼夜行譚ではない説話が、絵画化され、百鬼夜行絵巻と同様に絵手本として受容されたことを通じて、百鬼夜行譚として捉えなおされた現象も確認できる。これは、人々の百鬼夜行に対する認識が、百鬼夜行絵巻の介在により、変容が生じたことを意味しているよう。

〔使用テキスト〕主に以下に依拠しつつ、適宜、句読点等を私に改めた。

『風俗通義』『西陽雜俎』Ⅱ四部叢刊。『搜神記』『搜神後記』『抱朴子』『宋書』『南史』『太平広記』Ⅱ中華書局。『世説新語』『白氏文集』Ⅱ新釈漢文大系。『宋高僧伝』Ⅱ大正新脩大藏經。『本朝文粹』『今昔物語集』Ⅱ新日本古典文学大系。『口

遊』『幼学の会編』『口遊注解』（勉誠社、一九九七・二）。『政事要略』『新訂増補国史大系』『北野天神縁起』『日本思想大系』『塵袋』『東洋文庫』『化物草紙』『早稲田大学図書館所蔵本』『塵添瑤囊鈔』『大日本仏教全書』『善知安方忠義伝』『山東京伝全集（ぺりかん社、一九九七・四）』。

〔付記〕 本稿は二〇二〇年一月一四日、早稲田大学多元文化学会二〇二〇年度秋期大会における口頭発表を基に成稿したものである。また、本稿は二〇二〇年度早稲田大学特定課題（研究基盤形成）2020C-753の成果の一部である。

〔注〕

（1）伊藤昌広「百鬼夜行譚」（『中世近世文学研究』第二二号、一九七九・一）『伝承文学研究』第三〇／三二号、一九八四・八／八五・五↓小松和彦編『怪異の民俗学4鬼』、河出書房、二〇〇〇・一〇）。

（2）田中貴子『百鬼夜行の見える都市』（新曜社、一九九四・三）↓ちくま学芸文庫、二〇〇二・一二）、六八／六九頁。

（3）詞書付きの短い絵巻で、大阪市立美術館所蔵本と早稲田大学図書館所蔵本の二本が確認できる。両方とも模写本である。模写時期について、前者は貞享・元禄（一六八四～一七〇三）頃、後者は嘉永元年（一八四八）とされる。田中貴子注（2）著書、小松和彦監修『別冊太陽 妖怪絵巻：日本の異界をのぞく』（平凡社、二〇一〇・七）、木場貴俊「開放される『化物絵』」（橋弘文・手塚恵子編『文化を映す鏡を磨く…異人・妖怪・フィールドワーク』、せりか書房、二〇一八・七）↓「怪異をつくる…日本近世怪異文化史」第七章「化物絵…描かれる怪異」、文学通信、二〇二〇・三）、沢井耐三「大阪市立美

術館蔵『化物草紙』—絵画化された『今昔物語集』の怪奇説話—」（『室町物語の形象…怪奇ロマンとユーモア』、三弥井書店、二〇二〇・一）など参照。なお、同じ画題を持つ異なる内容の絵巻（ボストン美術館蔵）も報告されているが、小稿でいう『化物草紙』は、大阪市立美術館所蔵本と早稲田大学図書館所蔵本を指す。

（4）大阪で活躍した狩野派絵師の大岡春卜（一六八〇～一七六三）編、巻一「名物（洛中洛外名画）」の項に、該当絵図と詞書が載せられている。出典は『化物草紙』とされる。また「土佐光信筆」との注記がみられるが、沢井耐三氏は光信（一五二二？）の作品ではないとする。沢井耐三注（3）著書参照。

（5）室町時代・江戸時代における『今昔』の流布状況については、稲垣泰一「『今昔物語集』の流布と享受—室町時代から江戸時代中期まで—」（『文芸言語研究 文芸篇』第二二号、一九九二・九）、渡辺麻里子「近世」（小峯和明編『今昔物語集を学ぶ人のために』V「享受・研究・創作」、世界思想社、二〇〇三・一）など参照。

(6) 田中貴子氏は、怪異たちの移住先（傍線部g）が、御霊会がしばしば行われていた神泉苑のごく近所にあたることに注目して、「化物屋敷の住人たちの移動は人間に負けて自らをはい捨てた行為」だと指摘した。田中貴子注（2）著書参照。また、大勢の化物が行列をなして引越しするさまは、江戸後期の『稲生怪物録絵巻』にみられる。なお、菅近晋平氏は、「稲生怪物」譚の生成―原典・『今昔物語集』「三善清行宰相、家渡語第三十一」―（『論叢国語教育学』第一二号、二〇一六・七）において、『今昔』巻二十七第三十一話を（稲生怪物）譚「柏本」の原典とする。

(7) 『善家秘記』は散逸しており、逸文として七条が知られる。うち三条は、『今昔』巻十六第十七話「備中国賀陽良藤、為狐夫得観音助語」、巻二十第七話「梁殿后、为天宮被焼乱語」、巻二十四第十四話「天文博士弓削是雄、占夢語」と類話関係にある。『今昔』と『善家秘記』とのつながりについては、今野達「善家秘記と真言伝所引散佚物語―今昔物語集との関連において―」（『国語と国文学』第三五巻一―号、一九五八・一一）『今野達説話文学論集』、勉誠出版、二〇〇八・四）、後藤昭雄「三善清行『善家秘記』の新出佚文」（『日本古代の祭祀と仏教』、吉川弘文館、一九九五・三）『本朝漢詩文資料論』、勉誠出版、二〇二二・一一）など参照。

(8) 「鬼之董狐」とは、干宝が『捜神記』を劉惔（生没年不詳）にみせたところ得られた評価、すなわち怪異を記す優れた史官の意である。河野貴美子「鬼之董狐―干宝と三善清行を結ぶもの―」（『比較文学年誌』第四三号、二〇〇七・三）参照。

(9) 三善清行が識緯説に精通していたことをうかがわせるものには、彼自身が昌泰四年（九〇一）二月二十二日に醍醐天皇に奉った「請改元応天道之状」がある。所功『三善清行の遺文集成』（方丈堂出版、二〇一八・一〇）、孫英剛著・田中良明訳「三善清行「革命勘文」に見られる緯学思想と七・九世紀の東アジア政治」（水口幹記編『前近代東アジアにおける「術数文化」』、アジア遊学²⁴、勉誠出版、二〇二〇・二）など参照。

(10) 所功『三善清行』（人物叢書、吉川弘文館、一九七〇・一〇第一版→一九八九・九新装版）、同注（9）著書参照。

(11) 孔子や董仲舒のような大儒者がその博識や優れた洞察力により人間に変化した動物の正体を見抜く話は、『捜神記』『幽明録』などに数多くみられる。例えば、『瑠玉集』巻十二・鑑識篇第三、『太平御覧』巻九百十二・獸部二十四・狸、『太平広記』巻四百十二・畜獸九・狸などには、董仲舒が老狸の正体を見抜いた逸話が収められている。

(12) 『塵添壘囊鈔』巻十ノ十九では、「凶宅ノ事」という題で引用する。

(13) 『新釈漢文大系』第九十七巻、一三七―一三八頁。

(14) 『南史』巻二十二・王僧綽伝にもみられる。

(15) 『太平御覧』巻九百十二・獸部二十四・狸には、『風俗通』の逸文として引用。『風俗通義』怪神篇における怪異については、佐野誠子「志怪書誕生の素地としての『風俗通義』―『風俗通義』における災異と怪異―」（『中国・社会と文化』第一八号、二〇〇三・六）『怪を志す』第I部第二章第一節「応

劬『風俗通義』における災異と怪異——志怪誕生の素地」、名古屋大学出版会、二〇二〇・二）など参照。

(16) 『太平広記』巻四百・宝一・金上・蘇過に引用されている。

(17) 竹田晃・黒田真美子編『広異記・玄怪録・宣室志他（唐代Ⅲ）』（中国古典小説選6、明治書院、二〇〇八・一二四七頁）参照。

(18) 百鬼夜行に遭遇した後で暦を確認すると「忌夜行日」であった、という藤原常行にまつわる伝承は、『今昔』巻十四第四十二話や『宝物集』巻四などにみられる。

(19) 『今昔』巻二十七第七十三話「幡磨国、鬼来人家被射語」には、「然様ノ鬼神ハ、横様ノ非道ノ道ヲバ不行ヌ也。只、直シキ道理ノ道ヲ行ク也」とある。鬼が人の邸宅に侵入する際は、不当な道からではなく堂々と門から入るのだという。

(20) 前話「幼児為護、枕上時米付血語第三十」、後話「民部大夫頼清家女子語第三十二」。

(21) 『太平広記』巻四百五十四・狐八・劉元鼎に引用されている。

(22) 『狐草紙』は御伽草子の一つであり、原本は室町中期の成立とされる。ある僧都が美女に誘われて屋敷で快楽にふける生活を通すが、錫杖を手にした二人の僧侶が突然入ってくる、美人や周囲の者たちが一斉に狐の姿となって逃げだした。正氣に戻った僧都は寺の縁の下にいるのに気が付き、笑われながら故郷に帰ったという話である。『文観阿舍利絵巻』は『狐草紙』と同じ内容を持つ、画題の異なる絵巻である。図6・7の美人に化けていた狐が元の姿に戻って逃げ去る場面において、髑髏を戴く様子が確認できる。内田啓一「早稲田大学

図書館所蔵『狐草紙』と『文観阿舍利絵巻』—文観房弘真の後世におけるイメージ化—」（早稲田大学図書館紀要」第六二号、二〇一五・三）、沢井耐三「『狐の草子』—狐媚と賀陽良藤説話—」（同注（3）著書）参照。

(23) 『付喪神絵詞』は室町時代の御伽草子の一つであり、捨てられた古い道具が無念を晴らすために、妖怪と化けて人間に悪事を働くが、調伏されて成仏する話が語られる。「怪物画本」は妖怪の姿を画き、名前を添えて紹介する彩色の画集である。出版事情は不明であるが、図11と同様の図像は、安永五年（一七七六）年に刊行された鳥山石燕の妖怪画集『画図百鬼夜行』に確認できる。

(24) 『江戸名所図会』は天保年間（一八三〇—一八四四）に出版された七巻二十冊もある江戸の地誌である。『宵話』は文化七年（一八一〇）に出版された三冊の随筆集であり、「一夜話」ともいう。小松和彦監修『日本怪異妖怪大事典「狐火」』（東京堂出版、二〇一二・七）参照。

(25) 鈴木重三「京伝と絵画」（『近世文芸』第一三号、一九六七・四）改訂増補 絵本と浮世絵・江戸出版文化の考察」、ペリカン社、二〇一七・一〇）、『山東京伝全集』第十六巻「解題」（ペリカン社、一九九七・四、六九二頁）等参照。

【図版出典】

図1・3・4・8 藤原守純写『化物草紙』、嘉永元年、早稲田大学図書館所蔵。

図2・5・9 大岡春卜編『画巧潜覧』、元文五年版本、大英博

物館蔵。

図6 土佐光信画・藤原守純写『狐草紙』、嘉永二年、早稲田大学図書館蔵。

図7 『文観阿舍利絵巻』、江戸中期写、早稲田大学図書館蔵。

図10 『付喪神絵詞』、寛文六年写、国際日本文化研究センター蔵。

図11 『怪物画本』、出版事情不明、国際日本文化研究センター蔵。

図12 斎藤長秋編輯・長谷川雪旦画図『江戸名所図会』第十五冊、天保五年（一八三四）版本、早稲田大学図書館蔵。

図13 秦滄浪著・牧墨僊編『一宵話』第二編、文化七年版本、国文学研究資料館 三井文庫旧蔵資料。

図14～16 山東京伝著・歌川豊国画『善知安方忠義伝』、文化三年版本、早稲田大学図書館蔵。

図17 人間文化研究機構監修『百鬼夜行の世界』、角川学芸出版、二〇〇九・九、三二頁。

On Sprites in a Deserted House and *hyakkiyagyō* 百鬼夜行:
Starting with *Konjaku Monogatarishu* 今昔物語集 Vol. 27, Tale 31

CUI Pengwei

Konjaku Monogatarishu vol. 27, tale 31, which tells the story of MIYOSHI Kiyoyuki's 三善清行 encounter with many monsters in his new home, is considered to be one type of *hyakkiyagyō* (a procession of one hundred dangerous beings passing through the Heian capital on a given evening) in previous studies.

The purpose of this paper is to investigate the background and reception of *Konjaku Monogatarishu* vol. 27, tale 31. First, I examined the background of tale 31, by comparing the relevant records of MIYOSHI Kiyoyuki with the tale, as well as stories from *Fengsu Tongyi* 風俗通義 and so forth. As a result, it came to be that the type of tale 31 can be traced back to the literature of the Later Han Dynasty. However, some of the details were not confirmed until the Tang Dynasty. It can be argued that the tale was established in Japan under the influence of Chinese *Zhiguai* tales 志怪小説. It was originally included in the *Konjaku Monogatarishu* as a tale of fox spirits, not as *hyakkiyagyō*.

Second, I studied its reception by later generations. Tale 31 was depicted differently in *Bakemono sōshi* 化物草紙. In addition to fox spirits, there are many new monsters in the painting. And the painting became known to painters of the Edo period through its entry into the book of *Gakō senran* 画巧潜覧, becoming the *edehon* 絵手本 (painting examples) of the monster paintings. One of these monsters also appears in the *Hyakkiyagyō emaki* 百鬼夜行絵巻. At this point, tale 31, which was not originally a tale of *hyakkiyagyō*, was painted and passed down together with *Hyakkiyagyō emaki*, and was finally re-recognized as a tale of *hyakkiyagyō*.